

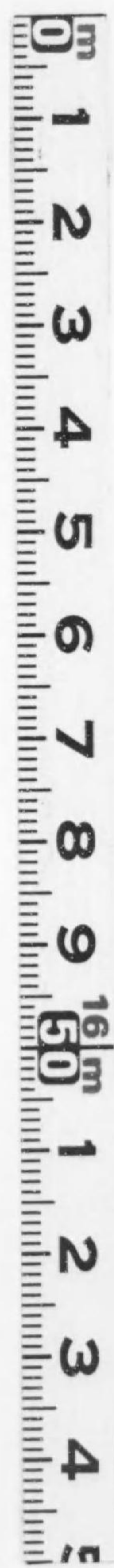
特115

760

トツレフンバ 社詩樹澁

扉の黙沈

1924 輯一第



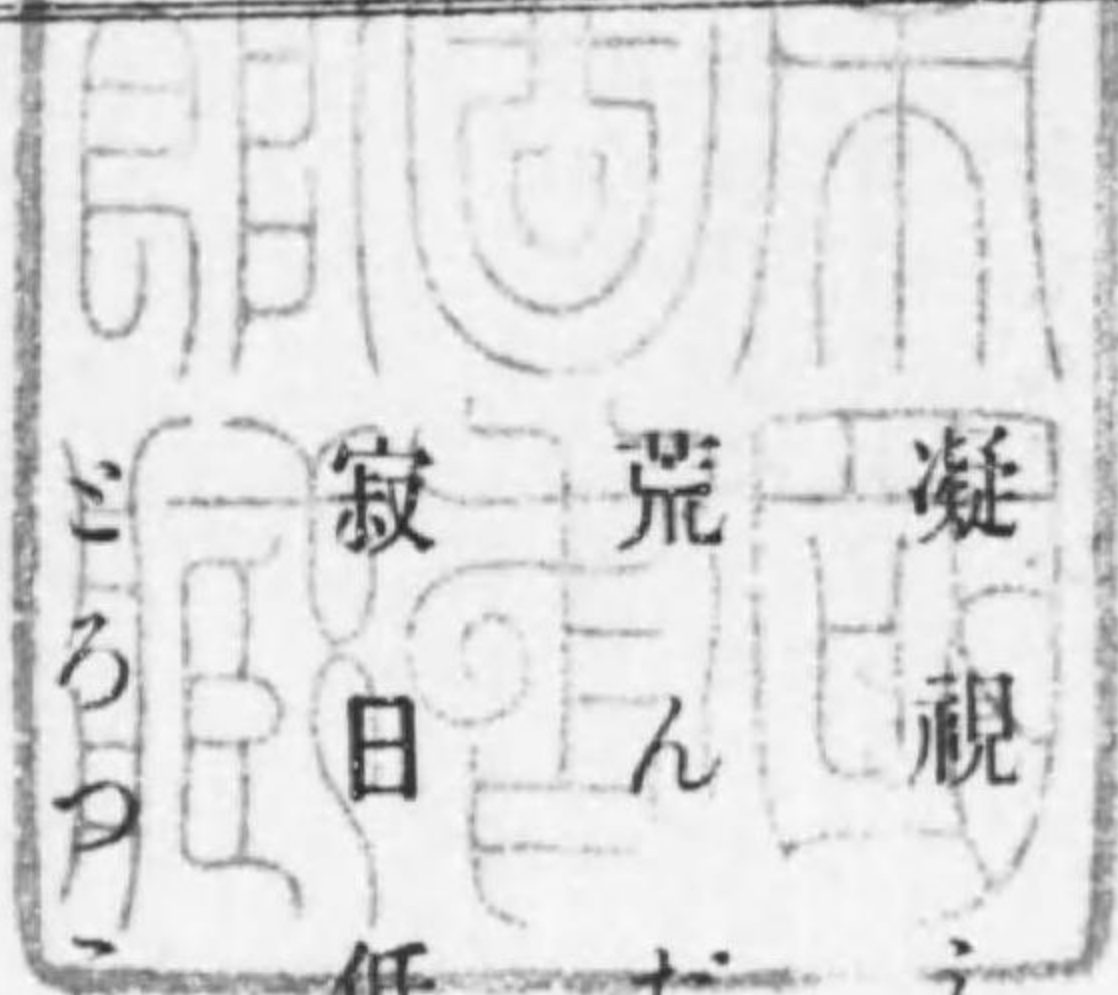
始



42/115
260

楳園詩社 第一輯

現代詩歌集 沈黙の扉



凝視
荒ん
寂日
低

て
地
唱
響

町野つとむ
大場耕太郎
渡邊かなめ
菊池宵吉

大正
13. 2. 23
内交

(1)

凝視して

町野つとむ

さびしさは
だれにかたらう
あてもない
うしろ手くんで
落葉でもあるかう。

(2)

しんみりとした
このころを
はぐくんで
わちばの多い
あの山に行かう。

さびしさは
わたしひとり
はぐくもう
楓が紅いな
あの山に行かう

(3)

ほゝに手を
あてゝさびしう
家を出る
胸に吹く風
なんとしようぞ

ゆふぐれの

風吹く丘に
しよんぼりと
なにを思ふか
俺のこころよ

(4)

此處に來りや
またもかなしい
思ひ出が
そーとよりそひ
なにかいふてる

ゆふかせが

わたしのむねに
そろそると
ふきだしてきた
街へかへらう

(5)

それもこれも
むなしの望みと
なり終つた
きのふやけふを
床にかなしむ

せきあげて

泣くやうなこゑが

からだ中

家にもひびいて

くれるいちにち

(6)

しかられて
だれにあたらう
わけもない
よしよしこころ
ひとりなけなけ

泣かれないし

泣くもおかしいし

めをおぼた

この手

この手でなんとしようか

あきらめよう
あきらめようの
おもひ出が
今日もひとりの
わたしをなかせる

夜がくれば
ひっそりしづまり
かごすみに
かくれる小鳥よ
なにをゆめみる

ふつとして
気がついたときは
音もよい
琴がどつかで
とほくひかれた

ねるまへの
さびしい気分が
ぼんやりと
鏡にうつる
胸だいてねよう

夢をみた

さびしい朝の

おきぬけに

ひよつと氣になる

枕のつめたさ

ごつとりと

重い音して

家中が

軽い不安に

ふける ろのふち

一本の

ろうそくの灯が

くらやみの

外にひかれて

ゆるぐわびしさ

可愛らしい

鳩がおりてる

おだやかな

めつきをしても

近くはよられぬ

どつか遠く
明るう笑ふは
かるたとり
なんぞであらう
床にねてさく

ふみいれた
冷たい水が
びしょくくと
足にまつはる
夕陽よい波

とやかうと
云ひまぎらして
妹の
さびしい笑ひを
そつと見つめる

なんとやら
かすかに風の
音がする
妹よ おいで
あれでも聞かうよ

叱つても

すぐなつきよる

妹の

きれいな眉に

まつはるかなしみ

妹よ

おまへはほんとに

しあはせだ

向ふをござらん

巢のない鳥だよ

少うしは

なにかあぶない

心地する

林ごむく手の

細い いもうと

ときたまに

つまらぬことを

いつてくる

妹 いもうと

うそはつくなよ

こつそりと

叱られたままの

おももちで

裏口にでて

何思ふ妹

夕空を

すつきり白く

かほまげて

上みる妹よ

なにをみてゐる

ほんのりと

妹のたつ

肩のあたりに

あがつた月は

何をゆめみる

せんもない

ことを怒るな

妹よ

あれは眼のない

慾深鳥だよ

そんなにも
なにかふしぎな
ことがあるか
妹 いもうと
あれは雪だよ

いつか降つた
雪にかすかな
おどろきの
こゑをたてゝる
妹のかはゆさ

なんとしよう
すべもないまゝ
氣も弱く
姉の子を抱き
裏口にでる

妹の
すしりなきさく
あのやうな
さびしさをさく
秋風 あきかぜ

荒んだ地

大場耕太郎

はなれゆく
友の姿よ
おゝさらば
達者で暮らせ
手をあげて振る

親友も
途に行くのか
悲しくも
汽車をながめて
心がないてる
やはらかな
布團のなかに
うづまつて
よく眠る兒よ
なにを夢みる

街はじの
火の見櫓の
赤い灯よ
夜道を歸る
俺がさびしい

ゆらゆらと
淋しくゆれる
街はじの
支那料理店の
赤い提灯

蘭島の
濱の小砂の
つめたさよ
月まろまろと
天に上つて

高々と
下駄をならして
前を行く
若い書生の
元氣が欲しい

年毎に
病のねこる
かなしさよ
左の胸に
手をあてゝみる

俺がまた
病むといつたら
なげくだろ。
なにも云ふまい
お、わが母よ

サラリーの
袋をもつた
もどかしさ
母よいますぐ
戻つて行くよ

いかにかの
金ではあるが
うれしいね
俺がかせいだ
報酬だもの

寂日低唱

渡邊かなめ

おだやかな
ころろで 青い
空をみた。
そらにまつかな
雲がとんでた。

あの山が
わしのころを
なぐさめる。
こぶしの花が
白くさく山

何時までも
因襲的な
生活を
すてようとせぬ
父はかなしい

丘の上に
ともしび一つ、
家のかげに
女がひとり、
雨の夜の街

村のおとこ
ほつかむりして
薪を割る
音がさびしい
ひなしくひといて

俺はたゞ
だまつてみてた
軒に立つて、
山と空との
わびしいくちづけ。

ねころんで
たばこふかせば
わびしやな
けむりはうすく
きへてなくなる

はいつたつて
まづしい俺には
買うものも
ない。三越を
電車からみる

晝 丘に

ねころんでふと
なつかしく
かみきり虫の
聲をきいてた

泣いて泣いて
なみだを袖で
ふいた時
うまれた村が
戀しくなつた

ふと湧いた
ノスタルヂアか
支那人が
小雨にぬれて
海をみてゐる

うすしろい
机のほこりを
そのまゝに
そつとして寝る
ひとりのこゝろ

あきらめて
今は、ラッパも
ほしがらず
空をみる兒の
わびしい顔よ

ひとすじの
髪のいのちの
たふとさよ
夕陽にぬれて
窓によるさみ

あきらめて
打綿工場に
つとめてる
友のひとみの
にぶい黄昏

ゆびさきを
かんで、おもてに
たつてゐる
街の兒の背に
雪ふりかゝる

あけがたの
うすらあかるい
窓をみて
しづかに きみを
おもふ一月

いたむ齒を
こらへて、そつと
窓による
われにしみじみ
赤い陽がさす

ほろ酔ひの
おとこを乗せて
秋の夜の
しづかな街を
幌馬車が行く

うしろ手を
はかなくみせる
人妻の
肩にひそひそ
雪が降つてゐる

「坊や そら
十錢やるよ」

「いゝや坊は

一錢でいゝよ」

師走の親子

むつつりと
慕標のごとく
おしだまり
ペンはしらせて
今日もくらした

かどぐちに
たつてしみじみ
空をみる
弟 ねまへも
村が戀しいか

雪の夜の
しづかな室で
なぜ そんな
かなしい眼つきを
するか 弟

だれもかれも
しあんありげに
目をふせる
師走の宵の
乗合自動車

こきたない
犬ではあるが
御主人の
愛犬だ、どれ
抱いてやろうか

にくまれた
様子もなく
今日の日も
どふやら暮れた。
家に歸ろう

とろつこの響

菊池青吉

この狭隘な町を横ぎつてゐる
とろつこれを
なま暗い憂鬱が流れる

今日も未明から石を積んで

連結した五六臺のとろつこは
開拓地風な情調をけむらせながら
一匹の馬にひかれて
はるかな海岸埋立地へ滑つてゆく、
もうひと組同じやうに後から滑つてゆく、
ごろごろごろごろ……

あゝなんと憂鬱なる響ではないか
苦しい息を吐き 息を吐き ひく
瘦せた馬を怯やかすやうな響――

290
716

沈黙の扉 [橄欖樹詩社パンフレット] 定價 叁拾錢

刷印日十月二年三十正大
行發日廿月二年三十正大

め な か 邊 渡 兼 輯 編
方本岩 四西町園花市樽小 者 行 發

郎 次 彦 谷 横 者 刷 印
五ノ四西町園花市樽小

社 會 式 株 刷 印 札 荷 樽 小 所 刷 印
五ノ四西町園花市樽小

發行所 小樽市花園町西四丁目 橄欖樹詩社 振替小樽三一五五番

終

